

第十九章

人生の悲哀は、心を和らげ人間性を育むために必要である——社会的共感の喚起は、単に才能を備える者よりも、しばしばより高次の人物を生み出す——道德的悪は、おそらく道德的卓越を生み出すために必要である——知的欲求に基づく刺激は、自然の無限の多様性と形而上学的主題を包む難解さによって、常に維持される——啓示に伴う困難は、この原理によって説明できる——聖書に含まれる証拠の程度は、おそらく人間の能力の発達と人類の道德的改善に最も適している——精神は刺激によって形成されるという考えは、自然悪と道德悪の存在を説明しうるように思われる

人生の悲哀や苦難は、心を柔らげ人間性を育て、社会的共感を呼び起こし、キリスト教的な徳を芽生えさせ、慈善が大きく働く余地を開く、欠かせない刺激である。順境が続くことは、概して人格を高めるよりもむしろ損ないがちである。悲しみを知らない心は、他者の痛みや喜び、欠乏や願いに深く共感しにくく、兄弟愛の温かさや親切で好ま

しい情愛に満ちることも少なく、どれほどの才能を備えていても人を真に気高くする力に欠ける。才能は精神の顯著で美しい特質ではあるが、人格のすべてではない。才能を伸ばす刺激に恵まれなかった人でも、社会的共感に触れて心が高く生き生きと働く例は少なくない。社会のあらゆる階層、とりわけ最下層にさえ、神と人への愛に満ち、人間的な優しさに富み、才能の有無にかかわらず、その存在のあり方において多くの才能ある人よりも高貴だと感じさせる人物が見いだされる。伝道的な慈愛や柔和、敬虔といったキリスト教的な徳は能力を必ずしも必要としないが、それらを備え、共感によって呼び覚まされた魂は、知性の鋭さだけを持つ人よりも天に近い交わりを思わせる。

卓越した才能が誤って用いられ、その規模に比例して害を生む例は少なくない。理性と啓示は、そうしたあり方が永遠の死に至るかに見えると教えるが、現世では、彼らと呼び起こす嫌悪や憎悪さえも、人々の共同の記憶や判断の形成に一役買ってきたとも言える。道徳的悪は、卓越した徳を生み出すうえで不可欠である可能性が高い。目の前に善しかなければ、人は盲目的な必然に動かされるだけで、その状況で善を選んでも美徳の傾向を示す証拠にはならない。無限の叡智は外的行為に頼らずとも、誰が善と悪のいづれを選ぶかを確実に予見できるという反論は、この世界が試練の場であるという構想

には異議を唱えうるが、この世で人間の心が形成途上にあるという前提にはそぐわない。この前提に立つなら、道徳的悪を目の当たりにしてそれを退け、嫌悪を覚えた人は、善だけを見てきた人とは本質的に異なる。両者は異なる刻印を受けた粘土であり、形もまた異なる。たとえ双方が同じ美しい徳の形を備えるとしても、一方は素材に堅さと耐久性を与える工程をさらに経ており、他方はなお脆く、偶然の一撃で壊れやすい。徳への強い愛と敬意はしばしば対立するものの存在を前提としており、形も実質も同じ美、人格における同程度の完成は、道徳的悪の光景を見てそれを拒むという刻印の経験なしには生まれにくい。

感情や身体的な欲求が心を行動へと駆り立てると、次に知的な欲求が芽生える。知識を求める願いと無知への焦りが、新たな重要な刺激となる。自然のあらゆる側面は、この種の精神的努力を促し、絶え間ない探究に尽きることはない糧を与えてくれるように見える。ある詩人はクレオパトラについて、こう述べていると伝えられる。

いくら見ても飽きぬ

その無限の変化よ

一つの対象に限って言えば詩的な誇張に思える表現も、自然に当てはめるなら厳密に真実である。自然の顕著な特色は尽きることのない多様性にあり、ところどころで重なり合い、差す陰影が、そのあふれる美に躍動感と生命感を与え、さらに輪郭の明瞭さや確かな存在感、立体感を添えている。優れた部分を支える粗さや凹凸、不均一さや相対的に劣る部分は、近視眼的で潔癖な視線には時に不快でも、全体の均整と品位、調和のとれた均衡に寄与している。

自然の姿や働きは尽きることがないほど多様であり、その多様さは多様な印象を通じて心をたちまち刺激し磨き、調査や検証、研究の場を広く与えて、向上のための豊かな源泉となる。しかし、単一で画一的な完全性にはそうした力はない。私たちが宇宙の仕組みを思い描き、星々を無限の空間に散在する恒星と見て、光と生命を無数の世界に注ぐあの輝く天体のうち私たちの目にとどくのはおそらく百万分の一にすぎないと考えるとき、創造主の偉大で理解を超えた力の前に心は畏敬に満たされる。それでも、すべての気候が一樣に穏やかではなく、一年中が春であるわけでもなく、被造物が皆同じ恩恵を受けるわけでもなく、雲や嵐が自然界を、悪徳や悲惨が道德の世界をときに曇らせ、創造のあらゆる事物が等しい完全さで形づくられていないことを、むやみに嘆いたり不

平を言ったりすべきではない。理性と経験は、自然の無限の多様性が細部の不完全さや見かけの瑕疵を伴いながらも、創造の崇高な目的にかなうようによく整えられ、生み得る善をできるかぎり大きくするよう適合していることを示している。

形而上学の問題には濃い影や曖昧さが付きまとうが、その難しさや暗さ自体が知への渴望をいっそう刺激し、知を求める興奮を高める。人はこの世に生きるかぎり、完全な満足に達することは難しい。とはいえ、それを理由に関わりや探究を避けるべきではない。好奇心を強く引きつけるこれらの論題を包む暗がりには、知的な営みへの動機を尽きることなく与えるためにあるのかもしれない。暗さを払いのけようと絶えず試み続けられ、たとえ成果が乏しくとも思考は活性化され鍛えられる。探究の対象が出尽くせば精神は淀む。しかし、自然の姿とはたつきは果てしなく多様であり、形而上学は尽きない思索の糧を与え続けるから、その時は来ない。

ソロモンの「日の下に新しいものはない」は、最良の格言とは言えない。むしろ、いまの世界のあり方が幾百万年続いたとしても、人類の知識は連続的に積み上がっていくだろう。ただし、人間の認知能力が目に見えて、しかも確実に高まっているとは言い切れない。知識量では現代の哲学者に及ばないとしても、ソクラテス、プラトン、アリス

トテレスの知的能力が大きく見劣りするわけではない。知性は小さな芽から伸び、その旺盛な時期には限りがあり、一生のあいだに受け止められる印象にもおそらく上限がある。しかし、その印象は際限なく変化し、芽の感受性の違いと相まって、世界には尽きない多様性が生まれる。結局、既存の知識が増えても、個々の精神の受容力がそれに歩調を合わせて拡大するとはかぎらない、と理性と経験は示している。小麦の粒は一つとして同じものはない。芽吹いた葉の違いの主因は土壌だとしても、それだけでは説明しきれない。やがて思考に目覚める芽にも生まれつきの差があると考えるのが自然であり、年端もいかない子どもに見られる感受性の大きな違いが、その推測を裏づけている。

最も優れた知性は、他者の思想を受動的に取り入れるのではなく、自ら独創的に考え、新たな結びつきを構想し、未知の真理を探ろうとする営みの中でこそ鍛えられるとされる。もし将来の発見への望みが断たれ、精神の営みが既存の知識の習得に限られ、独自の結びつきを生み出す挑戦が途絶える時代になれば、人類の知識が現在の千倍に達しても、知的努力を駆り立てる最も高貴な刺激は失われ、知性の最良の資質は損なわれ、天才につながる資質は枯渇する。そのような環境では、ロック、ニュートン、シェイクスピア、さらにはソクラテス、プラトン、アリストテレス、ホメロスと肩を並べるほどの

知的エネルギーを一個人が備えることはありえないと結論づけられる。

たとえ疑う余地のない天啓が授けられ、形而上学の諸問題を覆う霧が晴れ、心の本性と構造、万物すなわちあらゆる実体の性向と本質、創造の営みにおける至高存在のあり方、さらに宇宙の計画や設計、枠組みの全体像が明らかになったとしても、そうして増えた知見は人間の精神や知性を活性化させるどころか、今後の探究や精進をかえって抑え、知性の飛躍を鈍らせかねないという見方がある。

聖書の一部に疑問や難点があっても、それだけで神的起源を否定する決定的な反証とは見なされない。至高の存在は、奇跡を重ねて啓示を与え、万人に圧倒的な確信を抱かせ、ためらいと議論を一気に終わらせることもできたはずだが、その方法には重大で看過できない問題がある。創造主の計画の全体は理性では計りがたいとしても、その種の啓示の問題点を見抜く力は人間にも残されている。人間の理解の働きについて少しでも知っていれば、そうした圧倒的確信は人格の向上や道徳的成長を促すどころか、シビレエイに触れたかのように知的努力を麻痺させ、美德が成り立たなくなることがわかる。もし聖書の永遠の罰の警告が、昼の後に夜が来るのと同じ確かさで各人の胸に刻まれたなら、巨大で陰鬱なただ一つの観念が人間の諸能力を占め、他の観念は入り込む余地が

なくなる。その結果、人々の外面的行為はほぼ画一化し、善行は徳性の指標ではなくなり、美德と悪徳は人間の目には一つの塊のように見える。すべてを見通す神の目には違いがあっても、外見に頼る人間の目には同じものに映る。その条件下で、人が道徳的悪を憎み、神を敬愛し道徳的卓越をたたえる心が育つ道筋を思い描くのは難しい。

善悪の観念は必ずしも厳密でも明確でもないことがある。それでも、極めて重い罰への恐れや大きな報酬への期待だけに基づく行為を、真の徳とは多くの人が考えない。「主を畏れることは知恵の初め」は確かに妥当であるが、知恵の行き着く先は主への愛と道徳的善への敬意にある。聖書にある将来の罰の宣告は、不徳の進行を抑え、無関心な人の注意を喚起するのに役立つ。しかし、これまでの経験が示すように、来世への恐れだけを根拠に人の意志を圧倒し、内心に不徳の傾向を抱えたままでも徳にかなう生活へ導くほどの証明力はない。真の信仰は、キリスト教的な生活における諸徳として外に表れ、純然たる恐怖ではなく、むしろ愛に強く動かされた、望ましく徳にかなう気質の表れである。

人間はこの世では、身体の仕組みと自然法則のもとで避けがたい誘惑にさらされ、その結果、偉大な創造の炉からは歪んだ器も生まれる。この事情を踏まえると、神の手に

よる被造物の誰かが永遠の苦しみに処されるとは考えにくく、それを認めてしまえば、善と正義についての自然な理解は覆り、神を慈悲深く正しい存在として仰ぐ根拠を失ってしまふ。一方、福音が示す生と死の教え、すなわち義の究極は永遠のいのちで、罪の報いは死であるという教えは、公正で慈悲になつており、創造主にふさわしい。創造の営みから気高く美しく現れた存在には不朽のいのちが与えられ、歪んだ形で現れ、より清らかで幸福なあり方に適さない心を持つ存在は滅びて土に還るという見通しは理にかなう。この種の永遠の断罪は永遠の刑罰の一類型とみなされ、ときに苦痛の像で語られても不思議ではない。もつとも、新約聖書では、幸福と不幸よりも、生と死、救いと滅びがより頻繁に対置される。至高者を、過ちを犯した被造物を永遠の憎悪と責め苦で追ひ回す方ではなく、一般法則のもとで高次の幸福にかなう資質を欠いた者を無感覚に戻すだけの方と捉えるかどうかで、私たちに映る神の姿は大きく変わる。

概して、人生は来世の有無にかかわらず、それ自体がかげがえのない恩恵である。たとえ死を恐れない人であっても、悪事に手を染める者でさえ、与えられた命を自ら進んで捨てようとはしない。したがって、至上の創造者が無数の存在に最高の喜びを味わえる力を授ける過程で生じる一定の痛みや苦しみは、皆で分かち合う幸福に照らせば些細

であり、世界にある惡も、この壮大な創造の営みに不可欠な要素としての必要最小限を超えていないと考えるに足る根拠がある。

知性形成を規定する一般法則の必然性は一、二の例外があっても揺るがない。しかも、その例外は一時的や局地的な便宜ではなく、人類の大半に長期にわたって作用するよう意図されている。自然法からの逸脱である啓示は、心の形成の観点では、過程の各段階に應じて神が人間社会という大きな流れに新たな要素を直接加える介入だと捉えられる。その目的は、精神を浄め、高め、よりよい方向へ導く強い印象の連鎖を生み出すことにあり、啓示に伴う奇跡は人々の注意を引き、教えの出自が神か人かという核心を示し終えた時点で役目を終える。その後は、神の意志の伝達がもつ内在的な優位性に支えられて自然に広がり、道德的動機として働き、人間の諸能力を抑えつけて停滞させることなく、段階的に作用して改善を促す。

至高の存在が選んだ方法以外では目的を達成できないと断言するのは行き過ぎである。ただし、私たちに与えられた神の意志を伝える啓示には疑いと困難が付きまとい、ただちに無条件で普遍的な信仰を求めるような啓示には理性が強く異議を唱える。それでも、こうした疑いと困難は聖典が神に由来することを否定する根拠にはならず、むしろ聖典

が示す証拠のあり方こそが人間の知性を伸ばし、社会の倫理を高めるのに最もふさわしいと判断するのが妥当である。

この世の感覚や刺激は、至高の存在が物質を通じて精神を形づくるための手段とみなされる。そのうえで、悪を避け善を求めるには不断の努力が必要という必然が、そうした働きを動かす主な原動力だと考えるなら、人間の生をめぐる多くの難題は和らぎ、自然悪や道德悪の存在、なかでも人口原理に由来する無視できない側面にも筋の通った理由づけが与えられる。とはいえ、この前提のもとでは悪が世界から完全に消える見込みは乏しい。他方、その必然が生む圧力の強さが人の勤勉や怠惰に応じて増減しなければ、創造主の目的にかなわず、努力を促す強い刺激としても力を発揮しにくい。さらに、その強さや配分が絶えず揺れ動くからこそ、それを振り払えるかもしれないという持続的な期待が保たれる。

人の胸に希望は尽きず湧き

幸いは今にあらず、常に来たるべきもの

悪は人を絶望させるためにあるのではなく、行動を促すためにある。私たちは、悪をただ我慢したり、身を任せたり、受け入れたり、黙って従ったりするのではなく、それを避けるために進んで力を尽くし、行動すべきである。私たち一人ひとり、自らの内から悪を退け、影響の及ぶかぎり広くそれを取り除くよう、可能なかぎり努めることが、私益にかなうだけでなく義務でもある。さらに、この義務にたゆまず励み、より賢明的確に力の注ぎ先を見極め、適切に配分し、成果を上げ、成功を重ねるほど、心は磨かれ、高められ、創造主の意志をより完全に実現していることが示され、評価される。